

Kandai Style

2022.1 Vol.495
関西大学通信

世界の大舞台で
活躍する関大人

2022年。私の目標

2022年が始まりました。今月号の特集では、8人の学生に今年の目標を語ってもらいました。「今年はこんなことがしたいな」「こんなふうに過ごせたらいいな」と、ふんわりイメージするだけで楽しく、わくわくした気持ちで暮らせそうです。

今

年の目標は、「ビジネスセンスを磨く」、「信頼される社会人になる」の二つです。インターンシップに行っているゴエンジンという企業で、ヘアサロンのマーケティングに携わっており、新規顧客の獲得を目標にしています。この実務経験からビジネスセンスを磨いて4月から入社するIT企業の営業職で生かせるようにしたいと考えています。

また、社会人になって毎月決まったお給料をいただく意味は、与えられた仕事をこなすのではなく、「大場に任せたら大丈夫」という信頼される仕事をしてこそだと思います。簡単ではないですが、一つ一つ積み重ねてそんな社会人になりたいと思います。



商学部4年次生
大場 秀晃さん

海

外留学するのが目標です。大学生のうちに行きたいことの一つで、本当は2020年の秋学期に留学することが決まっていたのですが、コロナ禍により叶いませんでした。諦めて就職活動をする道も考えました。でも、「やっぱり諦めきれない。挑戦したい」という思いが強くて、今年留学できるように準備を進めています。

ゼミでジェンダーについて研究しています。日本と海外ではジェンダーに対する考え方や状況が全く違うと思います。それを学びに行くことで価値観が変わると思いますし、これから生きていく上で自分にとって必要なものを得られると思っています。



文学部3年次生
小山 夏波さん

仕

事に役立つ知識を身に付けて資格試験に合格すること、そして会社に貢献できる人材になることが目標です。

4月から東京の企業でシステムエンジニアとして働きます。就職活動を始めたころは、法学部から就職者の多い金融業界を志望していましたが、コロナをきっかけにIT業界に興味を持ちました。最終的に、手に職を付けられること、今まで経験のないことに挑戦しようという思いから、IT関連企業への就職を決めました。

大学で学んだことと畑違いの分野に進むので、自分の強みである好奇心とどんなときも平常心で前向きに対応できる力を武器に、新天地でもがんばりたいと思っています。



法学部4年次生
岡本 裕汰さん

応

用情報技術者試験の合格を目指しています。昨年の春、高度IT人材となるための基本的知識・技能を身に付けようと、基本情報技術者試験という国家試験を受験し合格しました。応用情報技術者試験の勉強は昨年の夏休みから始めました。より応用的な知識を身に付けて高校生のときからやってみたいと思っていたAIやロボットに関する研究と、就職先で知識を役立てたいと考えたからです。授業で学んだことが資格取得の勉強に役立ち、資格取得の勉強が授業の予習になっています。今年は大学卒業後の将来を決める大切な年なので笑顔で過ごしていきたいです。



システム理工学部
3年次生
金澤 優利さん

目

目標は、運転免許やファイナンシャルプランナーの資格の取得、TOEICの勉強に力を入れることです。コロナ禍で思うように活動できないので将来に不安を感じています。少しでも自信を付けたいと思って、今のうちに将来に役立つような資格を取得し、コロナが収まったら積極的に行動したいです。

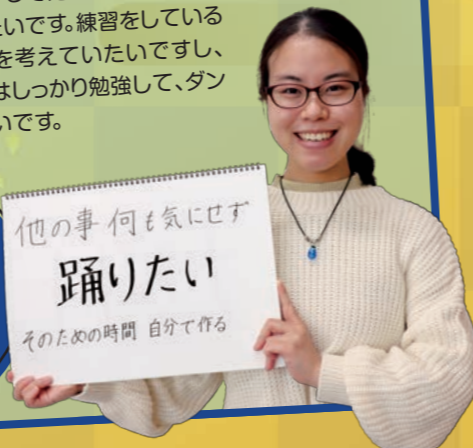
また、春学期の授業「導入ゼミ」で学んだ難民問題をたくさんの人に知ってほしいと考えています。ボードゲームでの遊びを通して難民問題を体験し学べるようなことを企画していて、ゆくゆくは企業とコラボレーションしたいなど思って準備を進めています。



政策創造学部
1年次生
山之上 飛鳥さん

舞

踏研究会とベリーダンスサークル Belly Divasで活動しています。今年の目標は踊る時間をつくること。関大に入学するまでダンスの経験はなく、大学生になってから始めました。基礎となる足形を繰り返し練習することも、ステップの練習もすべてが楽しいです。競技ダンスの大会に出場するときは、ヘアメイクをしてドレスを着ます。準備を重ねてせっかく出場する大会なので予選をクリアしてたくさんフロアに出て踊りたい。そのために練習をがんばりたいです。練習をしている時間は踊りのことだけを考えていたいですし、勉強すると決めた時間はしっかり勉強して、ダンスと勉強を両立させたいです。



文学部1年次生
前田 瀬里さん

ダ

ダンススタジオを作ることが目標です。2歳からダンスを始めて、今はバックダンサーやイベント出演、ダンススクールのインストラクターをしています。ダンスは年齢や性別など関係なく、誰でも自由に楽しめるもの。幅広い年代の方が周りの目を気にすることなく自由に踊れる場所を作りたいと考え、ダンススタジオの設立を決めました。今は同じ考えを持つ仲間と共に、レッスンプログラムを考えています。

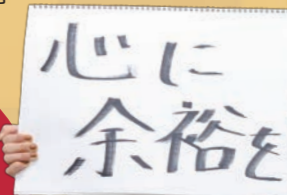
コロナ禍で動ける範囲は狭くなりましたが、明確なビジョンを持ち、夢の実現に向けて精一杯取り組んできました。慌てず焦らず諦めず2022年を前進していきたいです。



人間健康学部
2年次生
堀江 愛未さん

2

2022年は卒業後の進路を決める大切な年。目標は、自分に優しく人にも優しく、こつこつ努力できる人間になることです。以前は、絶対に英語力を生かせる仕事に就きたいと考えていました。就職活動をしている今、「英語が得意です」とアピールはしますが、自分がやりがいを感じられる仕事なら、どんな仕事にも挑戦してみたいと考え方が変わりました。コロナ禍によって予定していたイギリスへの留学ができずにとり落ち込みました。でも、留学していたらこの目標を掲げていなかったと思うので、巣ごもり期間があったから気付けたことがあるような気がしています。自分の中で「こうしなければいけない」ということを減らして心に余裕のある自分でいたいです。



外国語学部3年次生
西原 美優さん

効果あり?! ウワサの健康食事法

インターネットを利用すれば、簡単にさまざまな情報が収集可能な世の中になりました。ある意味「情報過多」ですよね。その中から自分に合った適切な正しい情報を取捨選択するのは、とても重要なことです。今回のテーマである「食事・栄養摂取」についても、多くの効果的方法がインターネット上にあふれています。例えば、持病がある方の食事療法からアスリートのパフォーマンス向上につながる食事法までさまざまなケースが混在しています。今月号では人間健康学部の弘原海剛教授が、治療目的としたものではなく、大学生を対象にした一般的な食事法を解説します。

Q1 毎日の食事で健康を意識して実践していることはありますか?

栄養不足で痩せてしまったため、なるべくカロリーの高いものを選んでる。
(商学研究科M1)

食べ過ぎると頭が回らなくなるから、時々断食している。
(文学部4年次生)

糖質の摂取を減らすために野菜やタンパク質を多く食べる。
(化学生命工学部2年次生)

はい(83%)

いいえ(17%)

むくみにくくなると聞いたから、グルテンフリー食品を食べている。
(商学部2年次生)

栄養素が偏らないように3食をしっかり食べる。
(政策創造学部1年次生)

血流への負荷を減らすために、油っこい物は食べ過ぎないようにしている。
(社会安全学部1年次生)

水を1日2リットル摂取する。
(外国語学部4年次生)

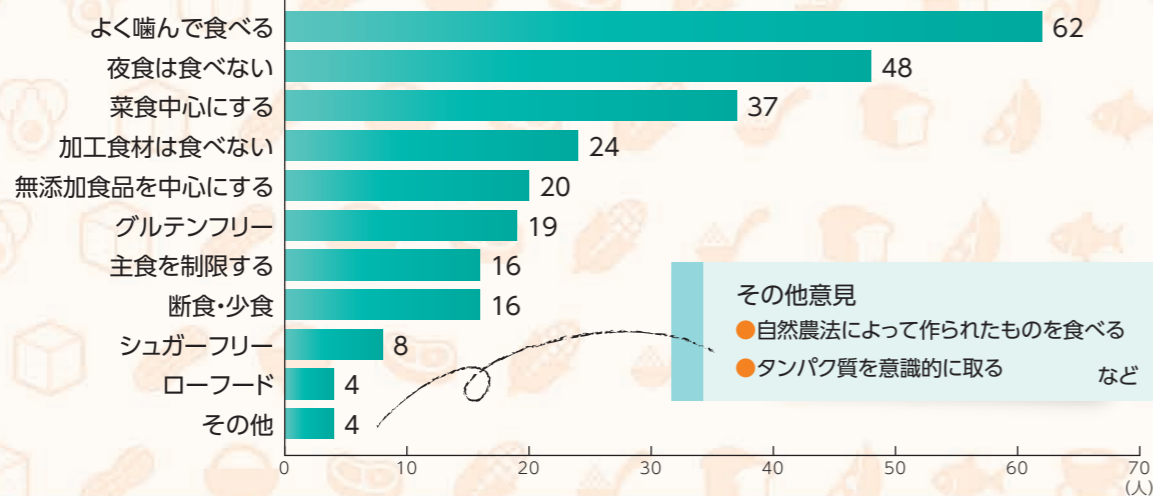
生活リズムを一定にするため、3食ほぼ決まった時間に必ず食べている。
(人間健康学部1年次生)

どんな食事をすれば良いのか具体的には分からないから。
(商学部2年次生)

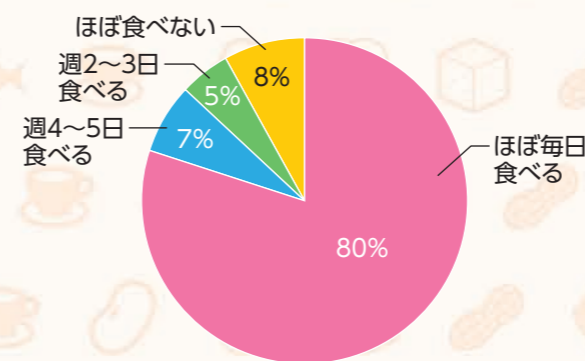
食べたいものを我慢したくないから。
(政策創造学部3年次生)

親が料理を作ってくれるので安心している。
(環境都市工学部3年次生)

Q2 今後、健康のために実践してみたい食事法はありますか? (複数回答あり)



Q3 朝食は食べますか?

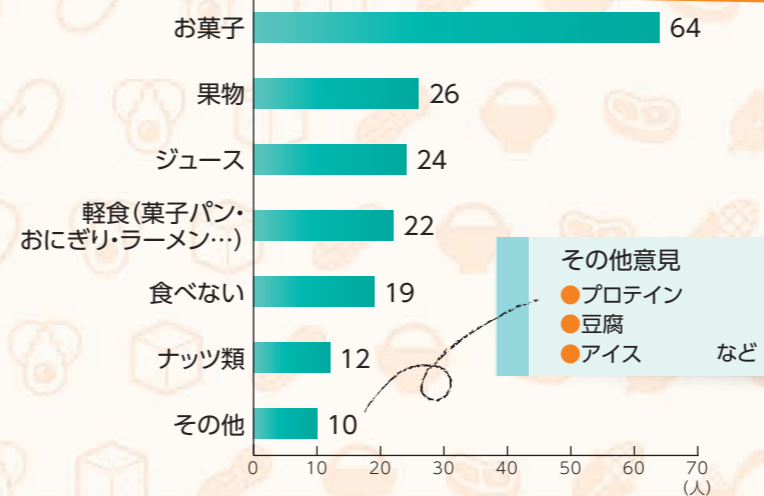


朝食の効果

朝食には1日をスタートさせる目覚まし時計のような役割があります。朝起きた時には7～8時間は食事をしていないことになり、体は飢餓状態になっています。朝食を食べずに空腹の状態で昼食を食べると、栄養素の吸収効率が上がり、太りやすい状態になる上に、空腹感が強まり「食べ過ぎ」をする原因になります。

午前中の授業で使う頭を働かすためのエネルギー補給に、朝食は必要です。また、朝食を取る習慣は、早起きにつながり、生活リズムが整います。1時限目の授業にも遅刻しませんね(笑)。

Q4 よく食べる間食は何ですか? (複数回答あり)



間食の食べ方

子どもの頃は、胃袋も小さく消化機能も未熟なため、大人のように一度にたくさん食べることができません。そこで、幼児期・学童期における間食は食事で不足しがちな栄養素を補給するのが主な目的で、食事の間に「おやつ」を取ることが重要でした。しかし、大学生になると、すっかり大人の体になりますので、昼食をしっかり取れば間食は必要なくなります。間食は習慣化したもので、必ず必要なものではありません。…とはいえ、間食は体だけでなく心も癒してくれる、心の栄養ですね。間食をしたなら、その分のカロリーを夕食時の糖質と脂質を減らしてコントロールしましょう! 取り過ぎなければ、間食は好きなものを食べてもOKです。



PROFESSOR'S COMMENTS
人間健康学部 弘原海剛教授

グルテンフリーや糖質制限という言葉がSNSなどで出回っています。どういう意味なのでしょう?
グルテンは、小麦に含まれているタンパク質のことで、

小麦粉を使った食材のモチツツ感は、この成分によるものです。このグルテンを摂取することでアレルギー反応を起こす人がいます。その人の食事療法として生まれたのがグルテンフリー(小麦粉製品を口にしない)です。糖質制限とは、1日で作る炭水化物の量を制限することです。これらは、いずれも目的があって実施する食事方法です。小麦アレルギーもなく健康な場合には、特にする必要はありません。

厚労省が発表する日本人の食事摂取基準では(18～29歳)、タンパク質：脂質：炭水化物=13-20：20-30：50-65%のバランスでの摂取が推奨されています。これからも分かるように1日の食事の半分は炭水化物(糖質)になっています。
運動をしたり、勉強をしたりするためには、糖質はなくてはならない重要なエネルギー栄養素です。

次回のテーマは… 「ワーク・ライフ・バランスについて」(仮)

3月号では、多様な働き方や仕事以外の時間の過ごし方をしている本学の卒業生を紹介し、ワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)の理解を深めます。

高校魅力化推進員／ハウスマスター



北海道大空高等学校(緑友寮)

佐野 桃果さん

大阪府立泉陽高等学校出身
2018年人間健康学部卒業

毎日を楽しみながら生徒の成長を見守るオールラウンダーです

2021年4月に開校した北海道大空高等学校の緑友寮で働く佐野桃果さん。ハウスマスターとして生徒と寝食を共にし、寮での生活を全面サポートしています。

佐野さんは、大学時代、母校・泉陽高校の器械体操部のコーチをしていた時に生徒の成長を近くで見守る仕事に惹かれ、教員免許を取得しました。

卒業後、高校の体育教師として勤務していましたが、一人の生徒と向き合う時間が限られ、生徒との時間を大切にしたいという葛藤や、自分の世界を広げたいという思いが募り、転職活動を始めます。その時に偶然出会ったのが、中山間地域や離島の高校にその地域ならではのカリキュラムや教育寮を設置し、魅力を創造する「高校魅力化プロジェクト」のハウスマスターという仕事でした。

「ハウスマスターは生徒の“やりたい”を支える伴走者のような存在です。必要な時に助言をして生徒の自主性を育み、安心して学びながら生活を送れる場として、寮生を支えています」と佐野さん。

生徒たちで寮の規則やイベントなどを決める会議で進展が見られない時は、結論を急がずに次の日に話し合うように促すなど、ゆとりを持って生徒と接しています。あらゆる場面において大学時代に所属していた器械体操部で、女子部員のまとめ役を務めた経験が生きています。以前は教師目線で指導していたことも、立場が変わった今は生徒と同じ目線に立って見守りつつ、成長を待てるようになったそうです。

「やりがいは日々の生活の中で生徒の成長を身近に感じられることです。生徒や先生の声聞き、地域の人とコミュニケーションを取りながら、新たなスタートを切った寮の基盤づくりを楽しんでいます。目指すのは、親や先生に話づらいことでも気軽に相談できる“お姉さん”です」。

最後に、「興味があることは何事も諦めずにトライしてください。入念に事前準備をして目の前のことに全力で取り組めば、本当にやりたいことが見つかります」とアドバイスをくれました。

ある1日のスケジュール

15:30 出勤、生徒の帰宅を出迎え
18:00 夕食
18:50 生徒と一緒に清掃
21:00 点呼
22:30 消灯
6:20 朝食
7:00 生徒の日誌への返信
7:40 生徒の送り出し
8:20 高校に出勤、事務作業
9:00 ハウスマスターミーティング
10:00 退勤



必須アイテムは、カメラとノート、スマートフォン。

House Master

VIVA!!

学び易



商学部 商学科

「専門演習」

中畷 道靖 教授

会計を学びながら、うどんやスコップも研究開発する

時には幼稚園ともタイアップします。

会計専修の中畷道靖教授のゼミでは、実際の企業活動や世の中の動きに密着した学生のユニークな活動をサポートしています。

学生は三つのグループに分かれ、「うどん」「住宅」「スコップ」といういずれも自由な発想をテーマに進めています。「簿記資格もちろん必要ですが、実際の世の中の活動では、資金の運用や管理は無視できません。プロジェクトを進める中で学生は自然に会計学などの基本を学んでいきます」と中畷教授は言います。

地域の活性化を勉強する「うどんを科学する」グループでは、香川県の「うどん県来客数No1」のチェーン店「こだわり麺や」と組んで、新たなおいしさを作り出す研究を始めました。データサイエンスの手法で客から味に関わるデータを集めて活用します。

「床から樹木が生えるようなオウチを」グループの活動のきっかけはコロナ禍による「巣ごもり」です。学生たちは自宅や下宿にこもるうちに、「我が家は案外、住みやすいな」と気づきました。そこで大手住宅メーカーと組んで、学生目線で住んでみたいエコハウスを追究しています。

「幼稚園児にデータサイエンスなスコップを」プロジェクトは、関西大学に併設する幼稚園で学ぶ園児たちの様子を見学したことが始まりでした。砂場遊びを見た学生が「環境に優しいスコップができないか」と発想しました。樹脂製のスコップの先端が、地中に入りすぎるうちに摩耗し、これが砂と混じると決して安全な砂場とは言えないと考えたからです。そこで素材を再考するとともに、園児たちの手のひらの大きさなどのデータを集めて統計的に分析し、使いやすいスコップを目指しました。

コロナ禍によりインタビューなどの基本的なデータ集めが困難となり学生は悪戦苦闘でしたが、八尾市のプラスチック成形メーカーに通い、試作品づくりに全力を1年半注ぎました。その結果、11月のお芋ほり行事で、園児に試作品第1号スコップを使ってもらえるところまで進めることができました。

子どもの感想を聞いて分析できるデータにするのは、大人を相手にするよりはるかに難しいそうです。表現力が不十分だからですが、中畷教授は「それもトレーニングです。文理融合で理系の先生と一緒に園児の声も分析し、喜んでいるかどうかなどを推定する方法も準備。学生たちはデータ収集のテクニックも学んでいます」と話しています。



【後列左から】竹藤大将さん(3年次生)、小瀬琢朗さん(3年次生)、原田啓太郎さん(3年次生)
【前列左から】西田健悟さん(3年次生)、橋爪詩織さん(4年次生)、福井亜実さん(3年次生)

さまざまなスコップ類を調べ、最も使いやすい形式は、全体が筒形で一つにまとまったシンプルな構造だと分かりました。ところがその後、理想を現実化することは簡単ではないことを痛感しました。メーカーの技術者からこんな指摘を受けたからです。「実際には、摩耗する部分だけを取り替える必要があり、その部分と摩耗しない柄の部分に分けて、後で二つを嵌合(かんごう)することが必要です」。アイデアを形にする、モノ作りとの対話、学の実化の大切さを思い知りました。

世界の大舞台で活躍する関大人

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会が昨年の夏に開催されました。数ある競技と種目の中で輝きを見せた選手、またその活躍の背景には大舞台で持てる力を十分に発揮できるように支えるチームの存在があります。競技の魅力や今大会の経験についてインタビューしました。



写真：松尾/アフロスポーツ

和田 伸也 (わだ しんや)

1977年、大阪府生まれ。2000年社会学部卒業、2002年大学院社会学研究科博士課程前期課程修了。長瀬産業所属。大学在学中、網膜色素変性症のため視力を失う。ロンドン2012パラリンピック5000mで銅メダル、リオ2016パラリンピック1500m、5000m、マラソンの3種目で入賞。東京2020パラリンピック1500mで銀メダル、5000mで銅メダルを獲得。

自分の可能性を信じて 一歩ずつ前進



和田伸也さん

東京2020パラリンピック
男子1500m(視覚障害T11)銀メダリスト
男子5000m(視覚障害T11)銅メダリスト

3種目に出場し、3大会で最高の結果に

東京2020パラリンピックでは1500m、5000m、マラソンの3種目に出場しました。最初の5000mでロンドン大会(2012年)以来の銅メダルを取れたので、非常にリラックスした状態で1500mとマラソンに挑めました。1500mで銀メダルを獲得し、最高の結果が出せてうれしく感じています。

私はもともとマラソンランナーです。ロンドン大会以降、マラソンは全盲と弱視の合同種目になりました。伴走が必要な全盲は単独走より不利ですので、全盲だけで競えるトラック種目に注力してきました。距離の異なる種目を世界レベルで両立するのは不可能と言われていました。私は器用な選手ではありませんでしたが、継続して挑戦した結果、3種目とも専門種目になったと思っています。

市民ランナーからスタート

私は大学3年の時に、網膜色素変性症という病気で視力を失いました。28歳の時、運動不足解消のため市民ランナーの練習会に参加したのがきっかけで、走ることが好きになりました。自己ベストを更新することが楽しくて、その延長線上で競技をするようになりました。

関西大学では8年前から、体育会陸上競技部との合同練習という形でグラウンドを使わせていただき、この3年間は週に2~3回大学で練習しています。やはり、陸上競技場では安全に質の高い練習ができますし、合同練習はお互いの刺激になります。

東京大会最終日のマラソンが終わって3日後には練習を再開しました。今は4年ぶりの冬マラソンに向けて準備をしています。5000mも1500mも自己ベストを更新するつもりですが、マラソンにいたっては、今大会が集大成と思って力を注いだトラック種目と異なり、まだ集中して強化できていません。スピードを生かしながら、来年、再来年と積み上げて、パリ大会に間に合わせたいですね。

継続すれば、必ず花開く

学生の皆さんには、目標に向かって継続してほしいと思います。すぐに結果が出なくても、10年、20年後……、いつか必ず花開くと思うんです。その時が来る前にやめてしまったら花は開きません。私は現在44歳。走り始めた16年前に、まさかこんなことがあるとは思いませんでした。人生、どこでどうなるかわかりません。歩みを止めずに、何にでもチャレンジしてください。



空手は私の人生そのもの

清水希容さん



東京2020オリンピック
空手女子形 銀メダリスト

オリンピック出場は大きな財産

今まではオリンピック出場を目標にすることができなかった空手が、今回追加競技として採用され出場できたことは私自身の大きな財産になりました。世界のいろいろな大会に出場してきましたが、オリンピックの舞台では今まで経験したことがないぐらい集中力が高まり、みんなにも「表情が全然違った」と言われました。

コロナでオリンピックの延期が決定した時は、調整がしっかりできると喜んでいました。けれども半年も過ぎると、試合自体がなくなったことで、自分の状態がどの程度かわからなくなるストレスで精神的に参ってしまいました。そんな時、メンタルコーチを目指している知人から「自然に体が動くくらい稽古すればいい」と言われたんです。確かにそれぐらい練習すれば、気持ちはどうこうじゃないと思えました。その言葉もあり、本番でも練習どおりの演武ができたと思います。

次世代に伝えていきたいオリンピックでの経験

オリンピック後は「こういう速い動きだね」「気合の音がすごいよね」というように多くの人から声を掛けてもらいました(笑)。競技についての問い合わせも増えたようで、今回のオリンピックで空手の魅力を少しでも発信できたのなら良かったと思います。将来は、自分を輝かせてくれた空手に恩返しの意味も込めて、次世代の子どもたちに自分の経験、オリンピックに出場した8人しか見てない景色をしっかり伝えていきたいと思っています。

自分の適性を探せる大学では何事にも挑戦を!

学生時代は講義を受ける教室と道場を行ったり来たりの日々でした。人間健康学部の授業は空手競技にも役立つことが多く、積極的に履修しました。授業内容が興味深く、先生に教わった体の使い方などを試合で実践するのも楽しかったです。私は空手に打ち込みましたが、大学はさまざまな専門的な勉強ができるし、大学でしかできないクラブ・サークルもあって、社会へ出る前に自分が進むべき道を探せる場所だと思います。いろいろなことに挑戦することで自分はこういうことに興味があったのか、こういうものが合ってたんだ、と気付けることもあります。自分はこれだけしかできないと思わず、何事にもチャレンジしてほしいです。



写真：西村尚己/アフロスポーツ



清水 希容 (しみず きよう)

1993年、大阪府生まれ。2016年文学部卒業。ミキハウス所属。東京2020オリンピック空手女子形で銀メダルを獲得。オリンピックの追加競技に空手が提案された際には、大会組織委員会のヒアリングで演武を披露した経験も。全日本選手権7連覇、世界選手権2連覇など、数々の大会で優れた成績を収めている。



女子日本代表チーム(後列右から2人目が松野さん)©FIBA

日本史上初の 銀メダル獲得を支えた トレーニング指導

松野慶之さん

東京2020オリンピック
バスケットボール女子日本代表チーム
スポーツパフォーマンスコーチ

自己管理の文化を東京2020のレガシーに

印象に残るシーンは舞台裏の選手の行動変化です。午前中に試合を終え、合宿先に戻った矢先、誰に指示されるでもなく選手たちが黙々とトレーニングを始める姿は、見ていて誇らしい気持ちになりました。長丁場の日程ではトレーニングの継続が不可欠で、1~2日間隔で試合が組まれるオリンピックでのベストなタイミングは「試合後」でした。接戦続きの中でも自主的にトレーニングに励む姿は「自分で自分の体を管理する」の理想像。銀メダルは言うまでもありませんが、選手の行動変容こそが、今後受け継いでいくべき「レガシー」だと思っています。

選手たちを信じることで高まった自主性

選手の意識改革に着手したのは就任当初から。自分の体に関心をもってもらうことから始めました。「適切に体を動かせば、動きやすくなる」と実感できるように指導し、自主的に補強に励む選手が次第に増えていきました。オリンピック直前では、それまで全体で行っていたクールダウンすら自分に必要なものを実践する選択制に変更。勇気のいることでしたが、選手を信じて主導権を渡しました。

スポーツが自ら進んで行動を起こせる教育の機会となれば、その価値はもっと高まるはず。そんな風土を今後もフィジカルの面から示していきたいです。



松野 慶之(まつの よしゆき)

1986年、東京都生まれ。2009年文学部卒業。株式会社R-body projectにて一般の方からアスリートまで幅広くトレーニングをサポート。2017年に日本バスケットボール協会専任スポーツパフォーマンスコーチに着任し、東京2020オリンピック銀メダルに輝いた女子バスケットボール日本代表のフィジカル強化を担った。

発声メソッドを利用したスクールで“声”が持つ力に気付く

大学時代に始めたアメリカンフットボールを続けながら求人広告の営業をしている時に、発声メソッドを利用したボイストレーニングスクールを担当しました。「発声は“背骨・肩甲骨・股関節”が重要」と聞き、アメリカンフットボールのトレーニングと同じだと驚きました。これはアスリートの身体調整に応用できる!と声を重視したトレーニングを始めました。退社後はスキル指導を行う「QB(クォーターバック)道場」と並行して、声の悩みを解決する「声トレ塾」も設立。ストレッチやマッサージで体の柔軟性を高めて声の出方や響きを変える指導をしています。

縁の下の力持ちとして“声”を使って選手をサポート

この仕事をきっかけに、視覚障がいのある選手がプレーするブラインドサッカー(5人制サッカー)のサポートコーチをすることになりました。プレーヤーが声を出し合うことで、ファウルを未然に防いだり守備力を強化することも可能です。監督の「声の力で守備は変えられる」という言葉にやりがいを感じました。チームは5位に入賞、戦力として声を使うという自分にも新しい挑戦で意義のある仕事になりました。今後は“声を持つ力”をさらに多くの人が体感できるよう、声を出すことの気持ち良さを発信し続けていきたいです。



新生 剛士(しんじょう たけし)

1968年、大阪府生まれ。1991年社会学部卒業。大学時代はアメリカンフットボール部に所属しQBをつとめる。卒業後は求人広告会社に就職。仕事を通じて発声メソッドを利用したボイストレーニングに出会い、退社後「QB道場」「声トレ塾」を設立。2019年よりブラインドサッカー・サポートコーチに就任。東京2020パラリンピック5位入賞の陰の立役者となる。



提供:日本ブラインドサッカー協会/鶴部春雄

より多くの人に“声を持つ力”の 可能性を伝えたい

新生剛士さん

東京2020パラリンピック
5人制サッカー(ブラインドサッカー) 日本代表チーム
ボイストレーナー



高野 芹奈さん(右)と山崎アンナさん(左)

高野 芹奈(たかの せな)

1998年、大阪府生まれ。人間健康学部4年次生。体育会ヨット部所属。2015年の420級世界選手権大会でジュニア部門1位(女子総合3位)を獲得。リオ2016オリンピックにセーリングでは史上最年少で出場。2019年の世界選手権大会では日本勢トップになり、2度目のオリンピック出場を決めた。SailGPでは2021年にレースデビューを飾り、さらなる活躍が期待されている。



オリンピック出場は私の誇り

高野 芹奈さん

(人間健康学部4年次生)

東京2020オリンピック セーリング女子 49erFX級

オリンピック2大会連続出場は貴重な体験

東京2020オリンピックセーリング女子49erFX級で2度目のオリンピック出場を果たし、とても光栄に感じています。この年齢で2度もオリンピックに出場できたことは貴重な体験でした。ここまで不自由なく活動できたことは本当に幸運です。それだけに、温かい応援をいただきながら18位という悔しい結果に終わったことは残念でした。

コロナ禍で開催されたオリンピックとあって、自由が制限され、とてもストレスがたまりました。特に私にとっては友達や家族との食事や会話がリフレッシュ方法の一つだったので、それが制限されたことは大変でした。1年間の延期も、決定当初はさらに成長できる時間ができたと考えていました。しかし、実際に自粛期間が始まり、国内だけの練習を繰り返していると、モチベーションを維持するのがかなり難しかったです。決して簡単ではなかった状況の中でもさまざまな人がサポートしてくださり、活動し続けられたことを本当にうれしく思います。

関大パワーで頑張ろう

復学した今は卒業論文を作成しながら、授業をオンラインで受講しています。競技活動で登校する日が少ない私にとって、友達と食堂でご飯を食べたり、テスト勉強を一緒にしたことが大学生活のすてきな思い出です。

今後は2024年のパリオリンピックへの挑戦を考えつつ、世界最高峰のヨットレース「SailGP」にもチャレンジしていきます。世界で戦うには「ビビらないこと」が一番大切。萎縮して自分に自信を持ってなくなるとは、積極的なレースはできません。将来的には女性セーラーとして、世界で活躍できる選手になりたいと思っています。

関大生の一員として、日本開催の特別なオリンピックに出場できたことは私の誇りです。皆さんもさまざまな分野で活躍する中で時々、諦めたくることや無理だと思う瞬間があると思います。私も挑戦を続けるので、絶対に諦めずに挑戦し続けてください。関大パワーと一緒に頑張りましょう!



写真:ロイター/アフロ



人間健康学部 4年次生

野口 智哉さん

**壁にぶつかった時こそ、苦手なことに向き合うことが大切。
自分が成長できるチャンス。**

2021年のプロ野球ドラフト会議でオリックス・バファローズの2位指名を受けた野口智哉さんは、体育会野球部で1年次からレギュラーとして活躍しました。10月の関西学生野球秋季リーグの最終戦では、見事に通算100安打を達成。これは同リーグ31人目の快挙です。「ずっと応援してくれていた仲間に達成した姿を見せることができ、ホッとしたというのが一番です」といいます。

小学1年生で野球を始め、6年生の時オリックス・バファローズのジュニアチームに所属、夏の全国高等学校野球選手権大会で甲子園にも出場しました。高校2年生の秋、本学野球部の練習に参加したことで早瀬監督から声が掛かり、大学進学を決めました。その時には4年間実戦を積み、プロの道へ進むことを目標にしていたと振り返ります。

学業と野球の多忙な日々をがんばれたのは、同じ学部で在籍する野球部の仲間と過ごす時間が楽しく、勉強と野球に打ち込む原動力になっていたからだそうです。

大学入学後、すぐにレギュラーを取り、「向かうところ敵なし」だと思っていた1年次生の秋、ターニングポイントが訪れます。秋季リーグの立命大戦で9回1死満塁のチャンスに凡退して敗戦し、悔しさのあまり初めて涙を流しました。これを機に、得意なことを伸ばすだけでなく、苦手なことに向き合うことが大切だと気付きました。「食事制限や走り込み、守備などのトレーニングを強化することで、走攻守すべての面で成長できました」。また、仲間の悔しそうな顔を見て以来、個人成績と同時にチームの勝利のためにすべきことを考えるようになりました。

入部当初、試合で成果が出せない時はベンチで下を向いていましたが、今は落ち込む後輩に声を掛け、うまく気持ちを切り替えられるように促しているそうです。

「大学で培ってきたことを生かして、プロでは開幕一軍を目指し、日々精進します」と熱く語りました。



リーグ戦で通算100安打を達成
(写真提供：野球部)

次回は、野口さんからのご紹介で鈴木れな穂さん(経済学部3年次生)が登場。お楽しみに!

Tomoya Noguchi

健康・健幸をテーマに地域貢献する堺キャンパス ——子ども食堂、金融リテラシーなど多彩な地域連携事業を展開——

関西大学には千里山、高槻、高槻ミューズ、堺など複数のキャンパスがあります。10学部が集まる千里山キャンパスは話題も豊富ですが、他のキャンパスにもユニークな取り組みがあります。今回は堺キャンパスの「人間の健幸を科学する」地域連携事業を紹介します。



大学は子どもたちの「居場所」

「かんだい食堂」

堺キャンパスの学生食堂を使って、地元の子どもたちに「食事」と「居場所」を提供しています。いわゆる「かんだい食堂」です。学生が子どもたちの宿題を手伝い、一緒に夕食を楽しみ、時に相談や悩みを聞いたりもします。この取り組みは好評で、年間10回程開催し、毎回約50人の子どもたちが集まります。

この活動では人間健康学部の安田忠典教授らが中心になり、学生が堺市や外部団体と協力して実施。さまざまな工夫を凝らして、メニューに専門店や企業の協力を得て、ピザや食後のお菓子を配っています。中には食品を扱うための資格を取得する学生もいます。今般のコロナ禍では、フードバンク大阪と協力し、フードロスの取り組みとして、「おすそわけ食マーケット」と形を変え、実施しています。こうした事業は、ゼミ活動とも連動しているのが特徴で、卒業研究のテーマに選ぶ学生もいます。

「みんなで踊ろう」

「みんなで踊ろう」という活動もユニークです。人間健康学部の原田純子教授らが中心になり、地元の高齢者と学生が共に楽しむダンス教室を開いています。健康と地域のコミュニティーづくりなどが目的ですが、年1回の本格的な公演に向けて練習をします。

2020年はコロナ禍の影響で練習の回数や公演の観客動員数を減らすなど、感染予防のためにさまざまな工夫を凝らしました。公演は市民ホール「フェニーチェ堺」の大ホールで実施。参加した高齢者からは、「一つの目標を持ち学生と交流を重ねて、大きな達成感を感じることができました」という感想が、また学生からは、「コミュニケーションに工夫を重ねたこと、協働作業によって目標達成を実現するという体験ができました」という感想が寄せられました。



体育館でのダンスは学生と住民のコミュニケーションの場



大学の学びをより身近に

「子どもたちにも金融の知識を」

堺市との地域連携事業の中には、人間健康学部以外の教員・学生が関わる事業もあり、最近の世相を反映した取り組みもあります。その一つに「子どもの金融リテラシー向上に向けた活動」があります。

「ガチャ」と呼ばれるゲーム上のギャンブル的な取引に巻き込まれた子どもや、闇金融にのめり込んで多額の債務を抱えてしまう若者たちなど、電子デバイスの発達により、金融トラブルに巻き込まれる機会が増えています。こうした被害をなくすために、経済学部の本西泰三教授らが中心となり、2018年度から堺市内の小・中・高等学校に出向き、金融リテラシーの向上につながる授業を行う他、YouTube上で中高生向けの動画を公開しています。

地域への貢献と人間健康学部の学びは深く関連しています。

学部・研究科・併設校トピックス

法学部／法学研究科

高度専門職業人養成コースを新設

法学研究科では4月より高度専門職業人養成コースをスタートさせます。新コースには、研究方法の習得や専門知識をブラッシュアップするための授業や「租税法務」「企業法務」「政策法務」「国際関係」に関するプログラムが用意されており、専門知識を積み重ねながら、キャリア形成ができるようになっていきます。また修士課程の修了にあたっては、従来の修士論文のほか、「リサーチペーパー」を選択できるようになりました。詳しくは法学研究科のウェブサイトや募集要項をご覧ください。

(副学部長 石橋章市朗教授)

文学部／文学研究科 東アジア文化研究科

10周年を迎えて

東アジア文化研究科は、今年度で設立10周年となりました。そのため今年度は10周年を記念してのパネル・ディスカッションなど、各種行事が開催されています。この10年の間には、「文化交渉学」の修士号・博士号を得た、たくさんの修了生たちが巣立っていきました。彼らは国内外の研究機関、公的機関、また企業などで活躍しています。彼らこそが、研究科の大きな財産であると思います。今後とも、東アジア文化研究科では人材育成に力を入れていきます。

(東アジア文化研究科副研究科長 二階堂善弘教授)

経済学部／経済学研究科

学生懸賞論文にレツトライ!

経済学部の教員・学生からなる経済学会では、この時期に学生懸賞論文のイベントを実施しています。毎年数多くの応募があり、教員による厳正な審査によって評価される一大イベントです。ゼミ研究報告が終わった3年次生の皆さん、卒業論文の提出が終わった4年次生の皆さん、ぜひ応募を検討してみてください。賞金を狙うのも立派なインセンティブですが、懸賞論文を準備するなかで、人に読んでもらう文章の書き方など多くを学べる良い機会になりますよ。

(学部学生相談主事 溝端泰和准教授)

各学部・研究科・併設校のさまざまな活動や取り組みなど、トピックスや皆さんへのメッセージをお届けします。

商学部／商学研究科

転換点にいる今

昨年7月5日の財務省の発表によると、2020年度は過去最高の収税であったとのこと。コロナ禍なのに、なぜ?となりますが、その要因として、消費税増税、巣ごもり需要や海外輸出好調による企業収益の増加、株高による金融所得の増大が考えられます。しかし、少子高齢化が進む日本において今後どのような状況になるか不透明です。

現在、With/Postコロナを見据え、企業、大学、行政が動き出しています。皆さんたちには、転換点にいる今だからこそ、将来を見据えて実行できる能力をこの在学中に身に付けてもらいたいと思います。(教学主任 英邦広教授)

社会学部／社会学研究科

フォトグラフィ実習が産学連携

メディア専攻の写真実習クラスでは学生13人がカメラのサブスク「GooPass」を体験し、最新機種と1カ月間を共にしました。

そのレポート記事が #GooPass MAGAZINEにて特集「関西大学×GooPass」として公開されています。ぜひご覧ください。

(溝口佑爾准教授)



政策創造学部／ガバナンス研究科

京都らしさの作法

私が住む京都では、正月飾りの鏡餅は1月4日に鏡開きすると決まっています。その一方で、門松は1月15日まで飾ることになっています。お正月に歳神さまをたっぷりお迎えはするが、お供え物はさっさと下げてしまう。この絶妙なズレが京都らしいなあと思っています。

もっとも、そんな気の早い鏡開きをしている家庭はほとんどなく、1月11日の方が普通になっているようです。ご飯抜きでは歳神さまがさすがに気の毒、と感じたわけではなさそうですね。

(杉浦勉准教授)

外国語学部／外国語教育学研究科

新年の抱負

新しい1年が始まりました。皆さん、新年の抱負(目標)を立てましたか?新年の抱負は英語で“New Year's resolution”と言います。私も今年の目標を立てました。目標はできるだけ目の留まる場所に書くようにしています(スケジュール帳の表紙など)。時々見ながら、下方修正したり、時には達成できなかったら次の年の目標として、引き続き掲げたりもします。何らかの目標を立てて、それについて語り合ったり、その実現に向けて少しでも努力したりすることが楽しいなと思います。

(植木美千子准教授)

人間健康学部／人間健康研究科

スポーツが人を豊かにする

昨年は、東京オリンピックが開催され、関西大学関係者としては「空手女子形」に出場した清水希容選手が堂々の銀メダルを獲得しました。感染拡大から久々の明るいニュースでした。人間健康学部のメインテーマである「健康(health)と健幸(well-being)」において自らが健康でいるだけでなく、みんなが「健幸」に暮らせる社会を実現し、より良い生き方を追求するという目標が心から願われる一年でありました。今年は、一日も早く新型コロナが収束し、本来の大学生活が取り戻せることを切に願うばかりです。

(椎古哲夫教授)

総合情報学部／総合情報学研究科

学部生が活躍中! プロモーション動画の制作

本学部4年次生の和泉樹里さん(写真左)と小川起史さん(写真右)が起業した動画マーケティング会社と本学部届出団体MCSの学生がタッグを組んで、学部の3ポリシー(ディプロマ、アドミッション、カリキュラム)をテーマにしたプロモーション動画を制作中です。完成した動画は学部公式YouTubeチャンネルで公開予定です。(学部長 名取良太教授)



社会安全学部／社会安全研究科

ケーブルテレビで防災情報の発信

社会安全学部とJ:COMと高槻市危機管理課がコラボして、防災情報を学生が発信するコーナー「つながるBOUSAI」を毎月、北大阪エリアで放送しています。2021年の秋には、シリーズ10回を迎えました。二次元バーコードから過去の放送がご覧いただけます。

(学部学生相談主事 近藤誠司准教授)



システム理工学部・環境都市工学部・化学生命工学部／理工学研究科

アフターコロナの対面コミュニケーション

ウィズコロナでは、本学でもオンライン授業を導入したように、多くの会議や面接などがオンラインでのコミュニケーションへと変容しました。

私の経験では、単純な知識・情報の共有はオンラインでもそれほど問題はありませんでした。新たな仕組みや、知識・情報などの創造過程において、複数人の共同による相乗効果を期待した議論や、飛躍的な発想や思考が必要な場合など、特にベースとする知識・情報が異なる人が多い会議ほど現状のオンラインでは難しいと感じました。そのような会議は

そもそも対面でも難易度は高いですが、オンラインとの違いは、会議前後の個別の雑談の機会にあるように思います。新しい複雑なタスクにおける速やかな共有認識の形成には雑談による個別情報交換を含む深い相互理解が有用になります。互いに良く知らない人の知識や背景、人間性への理解は、度重なる雑談の交流により深まり、その相互理解が新たな共有認識の形成を容易にします。会議、会議の場での公の雑談や個別の雑談などを周囲の状況に応じて切り替えることは現状のオンラインでは難しく、まだまだ対面が優位と

言えます。

アフターコロナでは、全てを対面に戻す必要はないと考えますが、オンラインによる多くの人の人との情報を共有する場と、対面での少人数による深い議論を進める場をバランスよく設けるだけでなく、二つの場をつなぐ場として、特にいまだ相互理解が形成されていない若い人や新たな人を対象として、オンラインによって失われた雑談の機会を補うための、これまでとは異なる効果的な対面の場を設けることが重要と考えます。

(環境都市工学部 原直也教授)

Attention 大学からの重要なお知らせ

春季休業期間中の注意事項

—有意義な春休みを過ごすために—

関大生としての自覚を忘れずに!

春季休業中は、今まで以上に行動の範囲が広がりますが、周囲の人々や環境への配慮を怠らないでください。誰か一人の軽率な行為によって、大学の名誉や信用を失墜させる事態を招くだけでなく、他の学生への影響もあります。関大生としての自覚を忘れず、良識ある行動を心掛けるようにしてください。

コロナに「感染しない・感染させない」

現下のコロナ禍を踏まえて、感染防止のため、3密(密閉・密集・密接)を避け、外出時のマスクの着用、手洗い・咳エチケットを徹底してください。また、静かな飲食を心掛けましょう。学生一人ひとりが「感染しない・感染させない」行動を。

薬物乱用は「ダメ。ゼッタイ。」

近年、大学生をはじめ若者の間で大麻による検挙者が急増し、深刻な社会問題となっています。大麻・覚せい剤をはじめとする違法薬物や危険ドラッグを安易に使用することは絶対にしないでください。あなたの健康や健全な学生生活を守るためにも、薬物乱用は「ダメ。ゼッタイ。」

悪質商法・カルト団体に注意!

大学生の間で、実際は何の価値もない商品やサービスを高額で購入させる悪質商法(ネットワークビジネスなど)やサークル活動を装ったカルト団体等による悪質な勧誘が横行しています。たとえ親しい友人や知人から勧誘を受けた場合でも、少しでも怪しいと感じたら、容易に応じないようにしてください。

秋学期試験が終了すると春季休業に入ります。学生の皆さんの行動範囲は少しずつ広がることでしょう。しかし、同時にこの時期は、日常生活からの解放感とそれに伴う気の緩みが相まって、さまざまなトラブルに遭遇しやすくなる時でもあります。貴重な春休みを有意義に過ごし、新学期または新生活を迎えられるよう特に次の点に注意するようにしてください。

学生生活の心得
かんだいLIFE



関大トピックス

「関大防災Day2021～広がれ!みんなの安全・安心～」を開催

11月30日、全キャンパスにおいて、「関大防災Day2021～広がれ!みんなの安全・安心～」を開催しました。この行事は「地震対応マニュアルの検証」と「地域防災力の向上」を目的に、学生・教職員・近隣住民を対象とした取り組みです。

千里山キャンパスでは、授業中に巨大地震が発生したと想定し、学内放送に従い身を守る行動を取りました。また緊急連絡メールシステムを活用した安否確認や、業務用無線でのキャンパス間の通信、発電機から電源を確保する訓練などを実施しました。

一方、関西大学幼稚園では防災頭巾をかぶり、大学キャンパス内への避難訓練を行いました。

今後も非常事態に備えて、防災や減災、災害時の安全・安心づくりへの意識啓発を行うべく、諸活動を展開していきます。



第69回全日本学生剣道優勝大会で61年ぶりの3位!

10月24日、エディオンアリーナ大阪(大阪府立体育会館)で、第69回全日本学生剣道優勝大会(7人制)が行われ、体育会剣道部が3位になりました。

1回戦から順調に勝ち進み、迎えた東海大学との準々決勝。この試合は代表戦へともつれ込み、主将の廣崎拓真さん(商学部4年次生)がチームの代表として出場。「みんなが一生懸命戦ってくれたので、勝ちだけを求めてきました。やってきたことを全て出し切れた一戦でした」と振り返りました。続く中央大学との準決勝は2-4で敗れましたが、1960年の第8回大会以来61年ぶりとなる好成績を収めました。



写真提供: 関大スポーツ編集部

(写真撮影時のみマスクを外しています)

関西大×法政大 SDGs アクションプランコンテストを開催

12月4日、連携協定を結ぶ法政大学との共催で、「SDGsアクションプランコンテスト～持続可能な未来のために私たちができること～」を法政大学市ヶ谷キャンパスで開催しました。

当日は一次審査を通過した10組の学生チームが、SDGs達成に向けての具体的な提案を行いました。

審査の結果、本学外国語学部の宇津見あゆさんが発表した「ジェンダーからたて楽しく学ぼう～ステレオタイプに縛られない自由な人生を～」が最優秀賞をはじめ、キリンビバレッジ(株)賞、オーディエンス賞を獲得。その他にも本学からは、「Yasuku」が「Yasuku～小売り店舗から出るフードロス削減するアプリ～」で優秀賞と(株)セブン&アイ・ホールディングス賞を、またクリエイト(株)・ダイドレ(株)賞に、「企業×商店街×保育園～街と人をつなぐビル～」を発表した「Divers」が選ばれました。



関大人 四方山話 ◆「その先にあるもの」 外国語学部教授 嶋津 百代



私の研究分野は日本語教育学である。大学や研究科では、日本語教師養成講座を担当している。カリキュラムの設定上、日本語教育専攻でない学生であっても、私の授業を受講することができる。日本語教師になりたい学生はもちろんだが、特に日本語教師を目指していない学生たちに、日本語教育学を通して何ができるのかを明確に示すことが、私の腕の見せどころとなる。そこで、すでに多文化社会である日本において日本語教育がかかわる場面がどれほど

あるかを知ってもらい、日本語教師にならなくてもいかに日本語教育にかかわっていただけるかを考えてもらうことに注力する。

このようにして、私は今年も、教養としての日本語教育の伝道師となる。結果だけで自分の能力や価値を判断されることが世の中には多くある。しかし、学生たちがひたむきに課題に取り組み、徐々に気づきを得ていく過程を見ていると、即時的な学びがすべてではないことを思う。「その先にあるもの」に期待してもよいのだと思う。

編集後記

今年の1月号にはさまざまな夢が詰まっています。多くの学生がコロナ禍の影響を受けながら歯を食いしばって、あるいはひょうひょうと壁を乗り越えようとしています。学生ではありません。会計学の教授は専門領域から多少はみ出しながら、うどんや幼稚園児の使うスコープの研究開発に力を入れています(6ページ「VIVA!学び場」)。44歳の校友で東京2020パラリンピックの銀メダリストは、次のパリパラリンピックで金を目指します(7ページ「世界の大舞台で活躍する関大人」)。さあ、あなたも「今年的一步」を。(広報課 深井麗雄)



関西大学通信 “KANDAI STYLE”

発行日:2022年1月11日

発行:関西大学広報委員会

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35

電話:06-6368-1121(大代表)

関西大学は2022年に大学昇格100年を迎えます

今月の表紙



撮影者:文化会写真部(フィルムパート)
山口 翔万さん(社会学部3年次生)

テーマ:有明

初日の出を眺める友人を撮影しました。コロナが猛威を振るう中で迎えた2021年。活動自粛の日々を過ごす中で、もうコロナ前の生活には戻れないと思うこともありましたが、日常が戻りつつあります。うれしい気持ちもありますが、油断せず感染予防をして楽しく過ごしていきたいです。

感染拡大予防策を講じた上で、取材や制作を行っています。